
ソードアート・オンライン

Fate (運命) の担い手となる者

黒の剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン F a t e（運命）の担い手となる者

【Nコード】

N3358Z

【作者名】

黒の剣士

【あらすじ】

「これは、ゲームであっても遊びではない」 その言葉から始まった死のゲーム。そんなゲームにログインしてしまった俺 佐東結斗、通称は、毎日命懸けの戦いを繰り返していた。そんなある日、手にいれた剣が俺の運命を大きく変えて ゲーム化アニメ化おめでとございますッ！！ そんなノリで書き始めたこの小説ですが、作者の自己満足のために書いているので、期待せず立ち読み感覚でお読みください。

プロローグ(前書き)

では、《ソードアート・オンライン》 Fate(運命)の担い
手となる者 《を、どうかよろしくお願いしますッ!!

プロローグ

俺は勇者にはなれない。俺は、ただのゲーマーだから。

でも、もし、こんな俺にも出来ることがあるなら、俺はそれを成し遂げたい。

この剣も、この世界も、全て偽りだとしても、俺は生きている。今、この世界で。

だから俺は剣を振ろう。例え明日、死ぬことになっても。

生き残るために。アイツに、もう一度会うために

『ガ……ガアアアアアアアアアアアアアアアア ツ!!』

絶叫、叫び。鼓膜を破ってしまうほどの雄叫びが、奴から放たれる。

その叫びに驚き、一瞬硬直してしまった俺の身体を奴は自分の尻尾で吹き飛ばし、横の壁に衝突させた。

突き抜ける衝撃。咄嗟に剣で直撃だけは避けたが、俺の命 H P
バーと呼ばれるそれは、もはや普段の青色から危険値の赤色にまで

変化していた。

「ぐうつ……………！」

フラフラになった足で、剣を杖代わりに立ち上がり、奴を睨み付ける。

奴は俺の視線に気付いたように唸りを上げ、翼を大きく開いて威嚇してくる。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

『ツ！！』

奴 推定レベル35以上のモンスター《ドラムシルバー》と呼ばれる白く輝かしい白竜は、その美しい翼を広げ、俺の身長のおよそ五倍を超える体格になった。

「ハハ……………」
「たく、本当にやべえなこりゃ」

本来、このモンスターはクエストボスだ。最低でも五人は必要なクエストを、俺はどうゆうわけか偶然フラグを立てていたらしく、強制バトルになってしまった。

自分の不幸さに思わず自虐的な笑みを浮かべる。ああ、まったく相変わらず運がねえな、俺は。

「ま、それでも関係ないんだけどな」

俺は地面に刺した剣を引き抜き、正面に構える。

黒白い輝きを放つ両手用の両刃直剣ロングソードは、まるでその声に答えるよう

に俺の手に馴染んだ。

HPがレッド？ 死ぬかもしれない？ うるせえ、そんなことは分かってんだよ。けど、どっちにしる此処 《結晶無効化空間》からは、出れないんだ。

《結晶無効化空間》とは、本来戦場ではもっとも最優先な回復、転移が出来なくなる空間。文字通り、俺たちプレイヤーにとっては最悪な場所だ。

しかも逃げようにもボス戦のため出入り口が封鎖されて逃げることもできない。ガチでヤバい状況だ。

絶体絶命、助かる確率10パーセント以下、BAD END一直線

「だからなんだ」

もう一度笑う。今度は自虐染みた笑みではなく、確かな笑みで。

「ハッ！ 死亡フラグ？ そんなもの知るかよ。言っとくが、まだ俺は死ねねえぞ。まだ、アイツに残した文句が山ほどあるんだからよ」

剣を握る拳に力がこもる。腰を少し落とし、意識を集中させていく。

そつだ、俺は

「お前を殺して、前に進む」

その言葉が、全ての引き金だった。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

ツ！！！！』

今の今まで力を溜めていたドラムは、この瞬間に力を爆発させ、とつもない勢いで突っ込んで来た。

圧倒的存在感。後一撃でも食らえば死を予測させるそれを、俺は逃げも隠れもせず

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！！」

そのまま突っ込んだ。

一瞬、自殺行為にも見えるその行動。しかしそれには、意味があった。

俺は地面を強く蹴り上げ、脅威のジャンプ力でドラムのスレスレを飛ぶ。

一瞬でも遅れたら即死の行動。だが、俺はその行動に怯えることなく敵の背を睨み付ける。

俺はドラムに飛び移るような姿勢で剣を振り上げて

「いつけえええッ!!」

エクアドルレア
単発重攻撃

解き放たれた剣技 《ソードスキル》は、俺の身体を操るように
凄まじい速さで振り抜かれた。

俺の剣がドラムの背に深く突き刺さり、俺の慣性の動きと同じよう
に一気に背中を引き裂いていく。

『ガアアアアアアアアアアアアアッ!?!』

ドラムの悲鳴が上がる。それと同時にギシギシ、と俺の剣が耐えき
れんと言わんばかりに音をたてる。

まるでブレーキ代わりのように剣をドラムに突き立てる。握ってい
る腕は振り払われそうになり、身体の至るそこから痛みが走る。

そして

パリンッ!

「チィッ!」

結局、剣は耐えきることが出来なかった。中間部分で折られ、勢い
を殺せぬまま後ろに放り出される。

「くっ!? しま」

一瞬で感じる死の予感。まるで時が止まってしまったかのように、全てが緩やかに感じる。

そんな状況で、俺は見た。

奴の尻尾が、俺の身体を貫こうと襲いかかるのを。

この勢いであれば、俺の命は100パーセント尽きる。死が、絶対的な死が、俺に迫り掛かる。

死ぬのか? こんなところで、俺は死んでしまうのか?

ふと、こんな時に頭に映像が流れた。これはいわゆる走馬灯という奴なのだろうか? 流れたのは皮肉にも、あの幼なじみのことだった。

『またね、結斗』

ドクンッ!!

血が、鼓動が、うるさいほど俺の中に響く。そうだ、俺はまだ死ねない。まだ、アイツに言い残した言葉が山ほどあるんだから。

だから !

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

叫ぶ、絶叫する。血肉が煮えぎたり、魂まで熱く燃えているような錯覚が起きる。

俺は身体を捻り、強引に身体の向きを変える。そして折らた剣今にもポリゴン化しそうな剣を、尻尾に向かって叩き付けた。

剣と尻尾がぶつかり、爆発音みたいなライトエフェクトがその場に響き渡る。火花が散り、身体に衝撃が突き刺さる。

その一撃で、ほんの少し、だが確かに 未来は、姿を変えた。

「グハッ！」

剣と尻尾がぶつかり、その僅かな一撃で俺の身体は少し右に逸れたまま吹き飛ばされた。

転がるように勢いを殺し、何とかHPを残すようにする。そして

「ガハッ！？」

俺の身体は、壁に叩き付けられることによって動きを止めた。

……頭がくらくらする。意識が、暗い闇へと持っていかれそうになる。

俺はフラフラになった目で、己れのHPを確認する。もうそれは、赤のゲージが数ミリという限界スレスレまでなっていた。

「……くそ、このままじゃ……」

俺は震える身体を起こし、ドラムを睨み付ける。もし、このタイミングで襲われたら

だが、その心配は杞憂で終わった。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』

ツ！！』

ドラムが、白竜が、悲鳴を上げる。引き裂かれた背中と断ち切られた尻尾から、無数のポリゴンを発生させて

パリントッ！ と、白く輝かしい光をあげ、ドラムはポリゴンとなりて消え去った。

……… ippittai、どれくらい時間が過ぎたのだろうか？ 余りに唐突だったため、目の前の現実が信じられない。

俺は大きく息を吸い、呼吸を整える。そして、確かに自分が生き残ったことを実感した。

レベルが40に上がったことを告げるファンファーレを無感動に聞きながら、俺は呆然と先程まで白竜がいた所を見つめる。

ポリゴンが消え去り、白い雪のように空へと消えていく。その中心

で

まるで、抜かれるのを待つように立たずむ、黄金の聖剣が突き刺さっていた。

……おそらく、あれが今回のクエストの報酬なのだろう。目安では片手用の直剣だろうか？ 俺はその剣に導かれるようにズルズルと身体を引きずりながら剣に向かった。

台座に突き刺さった聖剣。柄は蒼く、鍔の辺りは黄金色の塗装がされており、刃は白く美しく輝いている。

俺はそんな幻想的な剣を前にして

《 問おう、貴方が私のマスターか 》

ふと、そんな声が聞こえてきた。

システムの無機質な声ではない。まるで誰かの、少女のような声。驚いて辺りを見回すが、俺以外には誰もいない。

となると

「……クエストの続きか？」

もしかしたら、この声もクエストの内なのかもしれない。俺は再び、

金色の光を放つ剣を見つめた。

《 もう一度聞こう。貴方が私のマスターか》

「……………ああ。俺が、お前のマスターだ」

聞かれている意味はよく分からないが、おそらくこれもクエストなのだろう。ならば、一応答えたほうが良いだろう。

《 ならば、誓いを此処に。私は貴方の剣として、最後まで戦い抜くことを誓おう 》

そう告げる少女の声が響いた途端、剣は黄金の輝きを見せた。そして次の瞬間

「……………は？」

……………どうゆうわけか、俺の手のひらにあった。

ピッ！ と、強制的にウィンドウが開かれ、剣の説明が出る。

《フェイトレクイエム》

これが、俺とこの剣との出会いだった

プロローグ（後書き）

どうも、作者です。いやー、此処最近、いろんなジャンルに手を出してしまい、何を書こうか悩んでしまいます。

因みにこの作品ですが、Fateと関係しているのは剣だけです。流石にキャラクターを出すとそちらさんに持っていていかれてしまうので……。

後、出来ればいいんですが、主人公が使うこの剣の名前を募集しております。

……いや、だつてさ。Fateだつて言うのにまったく分からないし。てか厨二病だし！

神様、お願いしますッ！！　どうか俺にネーミングセンス＋文才を分けてくれッ！！

では、アンケートよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3358z/>

ソードアート・オンライン Fate（運命）の担い手となる者

2011年12月11日16時51分発行